

ヴィクトリア朝—「家庭の天使」になれなかった女たち

The Odd Women 研究ノート

大野 佳代子 (英文学)

はじめに

Virginia Woolf は Gissing の小説について、一つ一つの出来事を念入りに繋ぎ合わせていく彼の小説は、時にひどくつまらないと思わせるが、実はそうではないと、次のように言っている。“if you read steadily the low almost insignificant chapters gather weight and impetus; they accumulate upon the imagination; they are building up a world from which there seems to be no escape;”¹⁾ 1893年に発表された *The Odd Women*²⁾ は、まさに彼女が指摘するとおりである。読者は Gissing が念入りに構築した、リアリティに充ちた世界に取り込まれてしまい、逃れられない。彼が好んで描いたのは、自分と同じように天賦の才能がありながら、時代の厳しい社会制度や慣習に阻まれ、貧苦のうちに生活を送ることを余儀なくされている人々の姿であった。*The Odd Women* においては、男性という庇護者を持たず自力で生活していかなばならぬ境遇に置かれた5人の女たちの姿が、19世紀末期のロンドンを舞台にして写實的に描出される。

19世紀末の時代風潮について Bernard Bergonzi は、John Gross が *The Rise and Fall of the Man of Letters* で述べた次のような文を引用している。

it is undoubtedly possible to detect by the 1880's a widespread faltering of Victorian self-confidence, a new edginess and uncertainty about the future. Among writers, such a climate might have been supposed to favour a mood of determined realism, and so, in some cases, it did. But the commonest reaction was withdrawal, a retreat into nostalgia, exoticism, ...³⁾

そしてこの時代の社会を描くのに、Gissing ほどリアリズムに徹した作家はいないと、Bernard Bergonzi は言う。⁴⁾

『余った女たち』という題のこの作品で Gissing は、当時盛んになりつつあった女性解放運動に取り組む女たちの姿を好意的に描いているが、それとともに19世紀末の「結婚しない／結婚できない女たち」の実態がこと細かに描かれている。「家庭の天使」という言葉で代表されるように、貞淑な妻がもてはやされたヴィクトリア朝であったが、一方で「家庭の天使」になれなかった／ならなかった数多くの女たちの存在があった。本稿は、*The Odd Women* に描かれたそれらの女たちの日常を丹念に拾い上げ、彼女らの生活の実態を探るとともに、世紀末に存在していたであろう新しい時代の息吹を捉えようとするものである。

1) 余った女たち

いわゆる「女性問題」は、19世紀のイギリス社会において、きわめて深刻な問題であった。帝国が繁栄するにつれて、皮肉なことに過剰な女性の扱いをめぐる問題は、ますます深刻さの度合いを増していった。*The Odd Women* が発表されたとき、読者の反響は次に引用するように、「女性問題」をテーマとした、まことに時宜を得た傑作であるとして、概ね好評であった。“As might be expected,

Mr Gissing's new novel *The Odd Women* is intensely modern, actual in theme as well as in treatment.”⁵⁾ “His book represents the Woman questions made flesh; his people live it instead of talking it.”⁶⁾

The Odd Women の舞台は1890年前後のロンドン。次に引用するのは、15年ぶりに再会した Rhoda と Monica の会話である。“do you know that there are half a million more women than men in this happy country of ours?” ‘Half a million!’ Her naïve alarm again excited Rhoda to laughter. ‘Something like that, they say. So many odd women--no making a pair with them. The pessimists call them useless, lost, futile lives.’” (OW, p.37) 美しい若い女性の当然のこととして結婚を夢見ている Monica に対して、Rhoda は上記のような現実を教える。誰とでもいい、結婚出来さえすればと、どんなに結婚を望んだとしても、女が50万人も過剰なのである。Monica は幼い頃に両親を亡くし、辛うじて働ける年令に達したらすぐに、住み込みの店員になって自活を余儀なくされている境遇にある。何の確たる後ろ盾もなく、ただ漠然と良い結婚を夢見ているだけの Monica の、甘い考えを打ち砕くような厳しい現実を、この数字は示している。

次の引用は *The Odd Women* に登場するある数学者の言葉である。“it is the duty of every man, who has sufficient means, to maintain a wife. The life of unmarried women is a wretched one; every man who is able ought to save one of them from that fate.” (OW, p. 93) しかし、当時の男性が皆このように、「結婚して女を救うことは男の義務である」と考えていたわけではない。数学者の友人で、兄の遺産により1500ポンドの年収を得ることになった Everard には、「男の義務」という発想は微塵もなく、何人かの女と関係をもった拳げ句、結局自分と同じように裕福な階層の女性と結婚してしまう。現代の若者の間でもその傾向が見られるが、結婚により、それまでの豊かな生活レベルが少しでも下がるのがいやなのであろう。生活レベルを維持したいがために、生涯独身で過ごす男が少なからず存在したことも、「女性問題」の一因であったろう。

19世紀半ば以降の独身女性の数は、増加の一途をたどった。15歳以上の独身女性は、1851年に276万5千人であったのが、20年後の1871年には16.8%増加し322万8700人になっている。1851年の調査では女性の総数は男性よりも約51万人多かったが、独身女性と独身男性の数の差については、その後の20年間に72.7%も増加している。⁷⁾

産業革命の進行と鉄道敷設の急速な展開とにより、ヴィクトリア時代のロンドンはかつて例を見ないほど飛躍的に発展を遂げた。膨張し続けるロンドンの規模に呼応して、衣食住のあらゆる面で人々の要求を満たすために、さまざまな職業が生まれた。その結果、ロンドンでは、「貴族及び地主階級の人々と週給或いは日給で働く肉体労働者との中間に位置する、あらゆる人々」⁸⁾と G. Kitson Clark が定義する、中産階級に属する人口が急速に増加したのである。発達する銀行業・保険業や医師、公職など、膨張していく専門職に携わる人々のほかに、法律事務所や鉄道会社で働く下級事務員もこの階級に含まれる。

イングランドとウエールズにおける世帯所得額の平均がおよそ年80ポンドであった1860年代後期当時、実質的に中産階級的な生活水準を維持するためには、最低でも年収300ポンドは必要だったという。⁹⁾ しかし、下層中産階級である下級事務員の場合、最高でも年収200ポンドがやっとで、熟練した手工業労働者の賃金はしばしば、下級事務員のそれを上回るほどだった。下層中産階級や上層労働者階級は、もっと下の階級と自分たちとの区別を明確にしてみせるために、ことさら上品ぶった振る舞いをしようとした。このような傾向は、社会的階級が下がるほど顕著にみられたという。¹⁰⁾

家庭内の雑用に自ら手を下さないために、女中を一人雇うことが中産階級としての体面を保つために、当時最低限必要なことであったという。¹¹⁾ 先述の数学者の新居にも、勿論女中が一人いる。彼らはいわば中産階級として恥ずかしくない家庭を築くために、17年も結婚を延期したのだ。中産階

級の保たねばならぬ体面とは、一体何であろう。かつての日本における武家社会の「武士は食わねど高楊枝」にも似た、階級意識に根付いたこの体面が、19世紀全般を通じて如何に多くの女性たちを苦しめたことか。働いて収入を得ることは、男にだけ許されることであり、家庭が女の居場所とされた。生きるために働かなければならないということは、ひどく体裁の悪いことで、それだけで輦轡を買ひ、陰口を叩かれることなのであった。「良妻賢母」がヴィクトリア朝の中産階級の女の理想像であり、娘たちは生まれ落ちたときからこのゴールに向かって養育されていった。

しかし、庇護してくれる夫や父親がいる家庭はよいとして、収入を運んでくれる男を失った女たちは、一体どうやって生きていったのだろうか。Mrs. Gaskell は *Cranford* で、牧師であった父親の死後も、中産階級の体面にがんじがらめにとらわれて生きる二人の姉妹の姿を描いているが、彼女たちの暮らしぶりは決して裕福ではなかったもののおっとりとしており、悲壯感はまったく感じさせない。*The Odd Women* にも父親を亡くした姉妹の生活が描かれるが、こちらはもっと切実である。逼迫の度合いがはるかに強い。Gissing がリアルな臨場感をもって描いてみせたのは、明らかに *Cranford* の姉妹よりもはるかに下層の中産階級の女たちの姿であった。

2) 下層中産階級の女たち——Madden 家の姉妹

The Odd Women では主な人物として5人の女性が登場する。中産階級の女性の自立を目指して、女性のための職業教育に打ち込む Rhoda と Miss Barfoot。そして残る3人は Madden 家の姉妹である。1872年のある日、49才の開業医 Dr. Madden の急死により、彼の6人の娘たちは、19才の長女を筆頭に5才の末っ子にいたるまで全員が、たいした蓄えもなく、庇護してくれる有力な親戚もなく、一挙に世間の荒波の中に放り込まれるのである。年長の3人の娘は直ちに就職し、自活することになる。長女は年収16ポンドの保母兼家庭教師、次女は年収12ポンドでコンパニオン、3女は小間物店で住み込みの店員（無給だが衣・食・住つき）。下の3人は取りあえず知り合いに預けられ、父親の遺産の中から扶養してもらおうということに決まり、一家は離散。“Women, old or young, should never have to think about money.” (*OW*, p.2) というのが Dr. Madden の信条であったが、娘たちは彼の死後、絶えず金を意識し金に縛られた生活を余儀なくされることになる。

15年後のクリスマス間近のある日、物語は再び始まる。既に姉妹のうち3人は他界し、1887年という現時点で生存しているのは、長女 Alice (35才)、次女 Virginia (33才)、末っ子の Monica (20才)であった。失業中の Virginia が借りている部屋に、同じく職を失った姉 Alice が同居するようになり、姉妹の困窮した生活が詳細に描き出される。二人の生活設計の中に結婚という文字は全く存在しない。50万人も女が過剰の時代にあっては、よほどの金か容姿に恵まれた者でなければ、結婚のチャンスは得られないということが、よく分かっていたのであろう。

二人とも現在失業中の身である。父親の遺産で辛うじて送っている二人の生活は、非常につましいものである。ある日、もし二人とも今年暮れまでに職が得られなかったらどうなるのか、という辛い話題になり、二人は細かい生活のチェックをし始める。父親の遺産は総額800ポンドで、そこから二人が受け取る配当金は各々年6ポンドである。このほかに手持ちの金は、Virginia が1ポンド、Alice が4ポンド余り。つまり年末までこの先6ヶ月以上の間を、二人合わせて17ポンドで暮らして行かなくてはならないのだ。「そんなこと無理よ」と言う Virginia に対し、Alice は「いいえ、出来るわ」と、やや得意げに計算してみせる。1ヶ月に換算すると、2ポンド16シリング8ペンスということになる。更にこれを1週間に換算すれば、14シリング2ペンスである。しかし、この内の7シリングは部屋代としてあっけなく消えるのである。「週たった7シリング2ペンスで何もかも賄うなんて、絶対出来っこないわ」と悲鳴をあげる Virginia に対して、Alice は「これで、やるのよ」と強く言う。“If it came to the very worst, our food need not cost more than sixpence a day -- three and sixpence a

week. I do really believe, Virgie, we could support life on less -- say, on fourpence. Yes, we could, dear!" (OW, p.14) 何としても元金に手をつけるわけにはいかないのだ。食費は二人で1日に6ペンスあればOKではないか。“Is such a life worthy of the name?” と妹は嘆くが、姉は次のように言ってこれを戒める。“We shan't be driven to that. Oh, we certainly shall not. But it helps one to know that, strictly speaking, we are *independent* for another six months.” (OW, pp.14-15)

‘independent’ という言葉は実に不思議な力を持っている。それは、苛酷な現実にともすれば打ち砕かれそうになる二人の心を、奮い立たせ元気づける。彼女たちが何よりも恐れているのは、年老いて働けなくなり預金も使い果たしてしまったときに、救貧院へ入らなければならなくなるかもしれないということである。“‘If no one will give us even board and lodging for our services--’ ‘If we haven't a friend to look to, ... then indeed we shall be glad that nothing tempted us to entrench on our capital! It would just keep us’ --her voice sank-- ‘from the workhouse.’” (OW, p.15) 何とか働けるうちはまだいい。しかし、もし働けなくなったら、そしてその時に預金も底をついていたら、しかも救貧院へは絶対に行きたくない、そうしたら一体どうなるのだろう。一読者としても、二人の暗澹たる将来に、胸を塞がれる思いになる。

ある日の二人の昼食は次のようなものであった。

In a little saucepan on an oil cooking-stove was some plain rice, bubbling as Alice stirred it. Virginia fetched from downstairs (Mrs. Conisbee had assigned to them a shelf in her larder) bread, butter, cheese, a pot of preserve, and arranged the table (three feet by one and a half) at which they were accustomed to eat. The rice being ready, it was turned out in two proportions; made savoury with a little butter, pepper, and salt, it invited them to sit down. (OW, p.12)

これが一日のうちの主食である。主食はときには ‘mashed potatoes and milk’ (OW, p.20) であったりもする。朝は8時に起床し、夜は9時にココア1杯とビスケット1枚を取ったのち9時半に床に就く。出来る限り鉄道等は利用せず、出かけるときはもっぱら徒歩である。余暇に楽しむ本も、図書館から借りたものである。Monica の誕生日に、二人が思い切って用意したご馳走は、次のようなものであった。“There was a tiny piece of salmon, a dainty cutlet, and a cold blackcurrant tart.” (OW, p.33) 但し、Monica 一人の分だけである。

住み込みの店員として呉服店で働く末の妹 Monica の勤務時間は、1日13時間半である。食事の時間は20分間設けられているが、客があつて忙しいときには食事中であっても、すぐさま店に出なくてはならない。客との応対に手間取ると、部屋に戻ってももう既に食事は下げられてしまっている。部屋は5人の相部屋で、休日の夜などは皆帰宅時間が遅いため、午後11時半頃から午前1時頃まで、一人帰ってくるたびに物音がし、ガヤガヤとお喋りが始まる。悩みを抱え、一人静かに考えたいと思っている Monica は、眠った振りをして、皆が眠りに落ちるのを待たねばならない。

店員としての仕事は辛い。食事のわずかな時を除いて、1日中立ち通しである。“Sometimes, on Saturday night, I lose all feeling in my feet; I have to stamp on the floor to be sure it's still under me.” (OW, p. 34) あまりに長時間立ち続けているために静脈瘤で苦しむ者も多く、医者にかかるほどの者もある。特にクリスマスの頃は目が回るほど忙しく、土曜日の夜など午前1時まで立ちっぱなしで働かされる。同僚の一人は何度か気を失って倒れたが、その都度ブランディを与えられ、再び仕事に戻った。売上げ達成のノルマが決められており、その目標値に達しないと解雇されるため、売り子たちは体調が悪くても休んでいるわけにはいかないのであった。

これほど苛酷な労働環境でも、辞めるわけにはいかない。何故なら、次の職を見つけるのは至難

の業だからである。なかには幸運な場合もある。「身体が弱すぎる」という理由で解雇されたモニカ
 の同僚は、幸い小間使の職を手に入れることが出来た。年収25ポンドの小間使で、今までよりも10
 ポンドも多い。しかし、こんなことは非常に稀である。だから、どれほど悪条件であっても、仕事
 を辞めるわけにはいかないのだ。職探しに奔走し、苛酷な労働環境のもとで働き、体調を崩した果
 てに惨めに死んでいく女たちの実状について語る Monica に対し、Rhoda はこう言う。“I wish it
 were harder. I wish girls fell down and died of hunger in the streets, instead of creeping to their
 garrets and the hospitals. I should like to see their dead bodies collected together in some open place
 for the crowd to stare at.” (OW, p. 35) なんと冷たい厳しい言葉であろうか。彼女は「女だから」
 というただそれだけの理由で、自らは何の努力もせずに現状に甘んじている Madden 姉妹のような
 女たちが、歯がゆくてたまらないのだ。

3) 家庭教師と看護婦

1840～50年頃をピークに展開したチャーティスト運動には、多くの中産階級の女性が参加したと
 いう¹²⁾が、この頃まで女性にとって唯一社会的に容認された職業は、家庭教師であった。

The Odd Women で描かれる女たちのように、生活に困窮し職探しに奔走しなければならない女
 たちが求める職業は、とにかく世間に対し見苦しくないものということであったのだが、家庭教師
 の雇用の実態が如何に厳しいものであったかについては、C. Bronte が妹に宛てた手紙¹³⁾が語る通り
 である。1829年に家庭教師の窮状救済を目的とした組織が設立された。この組織はその後1843年に
 「ガヴァネス互惠協会」として新たに発足し、老齢に達し自活出来なくなったガヴァネスを対象に
 「年金支給制度」を設けるなど、さまざまな事業を展開したのであるが、「教師養成」のための取り
 組みもその一つである。一定以上の学識水準を保つことにより、ガヴァネスの社会的地位を安定さ
 せることが目的であったようである。¹⁴⁾

Jane Eyre で主人公の Jane が新聞に求職広告を載せた折の文言¹⁵⁾が示すように、国語の基礎的な
 読み・書きのほかに、フランス語・音楽・図画などが家庭教師に求められる必須の知識・技能であ
 ったが、実際にはこのほかに裁縫・刺繍なども堪能でなければならなかった。求職の方法としては、
 Jane のように新聞・雑誌に広告を出すほかに、知人の紹介、業者による斡旋があったが、1840年
 代・50年代当時既に求職数は求人数を大きく上回っており、従って給料や勤務内容等の雇用条件は、
 求職者側にとり非常に不利であったという。¹⁶⁾

35才の現在、失業中の Alice は次の職が見つかるまでの間、ぎりぎりに切り詰めた生活をする。
 父親の僅かな遺産を食い潰しながらの職探しが続く。Alice は勿論ガヴァネス養成の学校へなど行っ
 たことはない。教師としての公的資格を何も持たない彼女は、ガヴァネスとして働きたくとも、自
 分が極めて不利な条件下にあることを十分に承知している。読者をはらはらさせるほどの逼迫した
 状態が続くある日、彼女は妹と次のような会話をかわす。

‘I almost wish that I had accepted the place at Plymouth.’ ‘Oh, my dear! Five children and not
 a penny of salary. It was a shameless proposal.’ ‘It was, indeed,’ sighed the poor governess.
 ‘But there is so little choice for people like myself. Certificates, and even degrees, are asked for
 on every hand. With nothing but references to past employers, what can one expect?’ (OW, pp.
 13-14)

結局どんなに条件が悪かろうと、食・住が保証されてしかも世間体を保つことが出来るのだから、
 Alice としてはプリマス話を引き受けなかったことを悔やむ気持ちが大きいのである。

パンチ誌は家庭教師の面接にやってくる応募者たちを、いずれも若くもなく美しくもない女性ばかりとして描いた風刺画を掲載している¹⁷⁾が、住み込みの家庭教師を雇う側としては、あまりにも魅力的で才気煥発な女性では、余計な心配までしなくてはならなくなるので、避けたいというのは当然の心情であろう。Alice はやがて新しい住み込み先を得るのだが、先に紹介したパンチ誌の風刺記事からすれば、若いときから取り立てて人目を惹くところのない、平凡で不器量な娘であったという彼女の容姿が幸いしたのかもしれない。

しかし、苦勞して手に入れた家庭教師の仕事も、だんだんその内容がきつくなっていく。“At first merely a governess, she had gradually become children's nurse as well, and for the past three months had been expected to add the tendence of a chronic unvalid to her other duties.” (OW, p. 300)ガヴァネスとして雇われたはずの Alice の仕事はどんどん膨らんでゆき、やがて耐え難くなって彼女は辞める決心をするのであるが、乏しい財布の中身と自分の健康とを秤にかけての、苦しい決断であったことであろう。

看護婦が女性の職業として一般社会に是認されるようになるのは、1854年のクリミア戦争以降のことで、F.Nightingale の功によるものだ。イギリスの近代看護の創始者と言われる彼女は、1851年に「19世紀は女性の世紀となるはずだという古くからの伝説がある」¹⁸⁾と書いているが、1860年に聖トマス病院附属看護学校を発足させることにより、実際にその伝説の実現に向けて大きく貢献した。

看護という仕事は、はるか昔から女性の役割の重要な部門として存在していた。

彼女は不幸な人々、飢えと病気のために憔悴している人々を自ら看取った。化膿のゆえ、耐え難い悪臭のゆえに、誰もが正視できないような傷を彼女が丁寧に洗っているのを、私は何度見たことか！彼女は自分の手で病人に食事を与え、少しずつ、何回にも分けて栄養のある食物を与えることによって、死に瀕していた人を快方に向かわせた。¹⁹⁾

上の引用は、紀元390年にローマに病院を建てた貴族出身のある女性の業績を称えた一文である。Nightingale がクリミア戦争の戦場で傷病兵たちにしたのと同じことを、1500年も前にこの女性はしていたのである。古来、介護という仕事は常にキリスト教とともにあり、教養ある修道女によって行われてきた。それは、つまり、女性の職業としてではなく、献身と忍耐とを伴った優しさという女性の生来の資質を活かした、ボランティア行為としてのものであった。しかし、ヴィクトリア朝のロンドンでは、看護はそれによって生きるための糧を得ることの出来る、職業になっていた。しかもその多くはきわめて質の悪い者たちで、Nightingale が観察したところによれば、「感心しない性向の女性が看護婦として雇われ、男性の患者と、また若い医師たちと接触することによって一層無軌道に振る舞う」ようになったり、酔っぱらったり、「夜間眠り惚けて患者をほったらかしにする」²⁰⁾看護婦がしばしばいた。

Dickens は、*Martin Chuzzlewit* で貧しい患者の付添婦の典型として Mrs. Gamp を描いたように、作品中に看護人をしばしば登場させているが、ときにより 'nurse' と 'attendant' と表現されるこれら付添人からも、当時の看護婦の質がどのようなものであったかがよく分かる。*Oliver Twist* に登場する、病人や死者の世話をする救貧院の付添人もまた然りである。遺体から金目の物をくすね取るとか、病人の口に入るべき飲食物をかすめ取るとかいったことはいわば役得であり、少しも悪いことではないのだ。付添人であった Sally 婆さんは死の床で、かつて Oliver の母親の遺体から金目の物をくすねたことを懺悔するのであるが、その傍らで彼女に付き添っている友人の老婆は相棒に、医者から病人に飲ませるようと指示されていたワインを自分が飲んでしまい、なかなかよく効いたことを嬉しそうに話している。二人は今瀕死の Sally もかつては同じことをやっていたものだった。

たと笑い合う。“I mind the time,’ said the first speaker, ‘when she would have done the same, and made rare fun of it afterwards.”²¹⁾

イギリス陸軍はクリミア戦争で初めて、戦場での看護に女性に従事させた。それまでは軍隊では病人の看護は、すべて兵士（男性）の手によって行われていた。しかしこの戦争中に、戦場でろくに介護もされずに死んでいく夥しい兵士たちの悲惨な状況を、タイムズ紙によって知った国民たちの憤りが、ときの政府にこの決断をさせたという。²²⁾ 当時ともに参戦したフランス政府は、50人の修道女を戦地に派遣しており、フランス軍の傷病兵はイギリス軍の兵士たちよりも格段に手厚い介護を受けていたことも、イギリス人にとってはショックであったろう。イギリス政府はNightingaleに協力を要請し、彼女が率いる看護婦たちの働きによって、看護は女性の立派な職業としての第一歩を築くことになった。19世紀の後半には、従来の家庭教師に加えて新たに看護婦も、自活しなければならない女性にとって見苦しくない職業という社会的容認が得られるようになっていく。

4) Monica の選択

Monica は二人の姉の姿に恐怖心を抱いている。姉妹である自分にも同じ血が流れている。うかうかしていたら、いずれ自分も姉たちと同じように惨めに老いてしまうのではないか。あんな境遇には絶対なりたくないという思いが、彼女の頭の中にこびりついている。Monica は幼い頃から愛らしい子であった。20才になった現在もますます美しく、通りで行き交う男たちの目を惹き、職場の同僚の若い女たちから羨望と嫉妬の眼差しで見られている。しかし彼女の内心には、常に不安と焦燥感がある。自分の将来に対する不安と、早く何とかしなければという焦燥である。これらは二人の姉が引き起こしたものである。彼女が姉を見ていていつも感じるのは、忌避感・嫌悪感だ。爪に火をともしような貧しい生活を送りながら、むなしく年を重ねていく二人の姉の存在は、彼女には疎ましい。自分の将来の姿を見るようで怖いのだ。

She thought of her sisters. Their loneliness was for life, poor things. Already they were old; and they would grow older, sadder, perpetually struggling to supplement that dividend from the precious capital--and merely that they might keep alive. Oh!--her heart ached at the misery of such a prospect. How much better if the poor girls had never been born. (*OW*, p.31)

Monica は、姉のようにはなりたくないという一心で、愛してもいない24才も年上の男との結婚を決意する。年収600ポンドの彼と結婚すれば、一生生活に困ることはない、姉たちのように惨めで寂しい生活から免れることが出来るというのが、結婚を決意した彼女の無意識の動機であった。彼女はあるとき、愛してもいない男との結婚を批判する友人に対して、自分は「独身では生きていけない」と、次のように言う。

It seems to me that it would be dreadful, dreadful, to live one's life alone. ... Whenever I think of Alice and Virginia, I am frightened; I had rather, oh, far rather, kill myself than live such a life at their age. You can't imagine how miserable they are, really. And I have the same nature as theirs, you know. (*OW*, p. 111)

しかし、彼女がいわば打算で結婚した夫 Widdowson は、妻を完全に私物化しようとする考え方の男であった。彼にとって妻は、自分の思い通りになる人形のようなもの。美しく、可愛く、従順であればそれで大満足なのである。男に甘えたり頼ったりせずに、独身で男と同じように社会で仕事

を持って生きていこうとする、Rhoda や Miss Barfoot を ‘unwomanly’ だとして嫌悪する彼は、Monica にこう言う。“Women’s sphere is the home, Monica. Unfortunately girls are often obliged to go out and earn their living, but this is unnatural, ...” (OW, pp. 152-53)

Widdowson は全身全霊をもって Monica を愛した。妻を喜ばせるためにはどんな浪費も厭わない。鬱々と沈みがちな妻の気晴らしになることならと、妻の望むまま何週間も旅行に出かけたりもする。だが彼は同時に妻にも、彼に対して同様のことをすることを望んだ。つまり、彼女のすべてを彼のために捧げることを望んだのである。彼は起床から就寝までの1日のすべてにわたり、いつ何がなされるべきかを、細部まで綿密に決め、それに従って行動するのを常としていたが、妻にも自分の決めたとおりに行動することを強要する。妻が常に彼の思い通りに動いていないと、妻のすべてを知っていないと、彼は不安なのだ。家庭とはこうあるべきだという自分の理想像に、彼はあまりにもとらわれすぎた。結婚直後、Monica が “What a change you have made in my life, Edmund! How much I have to thank you for!” (OW, p.153) と言ったとき、彼は無上の喜びを感じた。夫が庇護し、妻がそれに感謝するという関係を、“the perfect relation of wife to husband” (OW, p.153)と考えていたからである。

このような夫からの一方的な愛情の押しつけに、耐え切れなくなった Monica はやがて不倫に走り、二人の結婚生活は破局に至るのであるが、Monica の背信行為に気付いた Widdowson の述懐が印象的である。

We are unsuited to each other. We do not understand each other. Our marriage is physical and nothing more. My love --what is my love? I do not love her mind, her intellectual part. If I did, this frightful jealousy from which I suffer would be impossible. My ideal of the wife perfectly suited to me is far liker that girl at the public-house bar than Monica.” (OW, pp. 238-39)

自分のどこが Monica に疎んじられるのか、彼には分からない。彼には自分の気持ちも、Monica の心も分からない。はっきりと分かるのは、この結婚は間違いだったということだけである。彼は Monica に惹かれた。Monica は普通の女店員とはどこか違う、異なった雰囲気を漂わせているように、彼には感じられた。だから彼女に夢中になり、どうしても結婚したいと望んだのである。しかし結局、Monica が彼を惹きつけた「他の女の子と違う所」が、彼を苦しめることになる。“Monica’s independence of thought is a perpetual irritation to me. I don’t know what her thoughts really are, what her intellectual life signifies.” (OW, p. 239)

彼が家庭・妻に対して抱いていた理想像は、ヴィクトリア社会が女性に対して期待していた理想像でもあった。妻は夫をまるで神の如くに敬い、夫の言うことに従順で、全面的に頼りにし、甘えなければならない。そして、夫のために家庭を常に居心地の良い空間にしつらえておかなければならない。もし Widdowson が、明らかに精神的にも階級的にも彼よりもずっと劣った女と結婚していたなら、そしてその女が優しく愛らしく従順であったなら、彼は結婚生活においてこれほど辛い惨めな思いを味わうことはなかったであろう。パブで働いている可愛い女の子を見たとき、こういう女と結婚していれば、もっと幸せな家庭を築けたかもしれないと、彼は思うのだが果たしてそうであろうか。

Monica が Widdowson と結婚すると聞いたとき、Rhoda は Miss Barfoot に “No doubt she has weighed advantages. If the prospects you offered her had proved more to her taste she would have dismissed this elderly admirer.” (OW, p. 120) と言ったが、先にみてきたように、実際には Monica はただ金銭的な打算だけで結婚を決めたわけではなかった。「姉のようになりたくない」これが最も

強い動機であったのだ。しかし彼女は夫が望む「家庭の天使」には、なりきれなかった。

7) Rhoda の選択

Rhoda が結婚しないと決めて取り組んでいる仕事とは、彼女の言葉によれば、“To make women hard-hearted.” (OW, p. 37) である。彼女はこの時代に女であることの利点を Everard にこう言う。

“There’s one advantage in being a woman. A woman with brains and will may hope to distinguish herself in the greatest movement of our time--that of emancipating her sex. But what can a man do, unless he has genius?” (OW, p. 87) 今という時代には、女である方がやり甲斐のあることがいっぱいあるのだと言う彼女は、生き生きと輝いている。従姉である Miss Barfoot を除いては、かつてそのようなタイプの女性に出会ったことがない Everard には、彼女がひどく新鮮に映り、彼女に惹かれていく。

現在33才の Everard は、20代の頃に結婚していたら、自分は普通の男と同じような基準で結婚していたであろうが、今は考え方が変わったと Rhoda に打ち明ける。彼の結婚観は “If I marry now, it will be a woman of character and brains. Marry in the legal sense I never shall. My companion must be as independent of forms as I am myself.” (OW, p.144) というものであった。互いに束縛し合うことなく、互いにその意志を尊重し合い、完全に平等であるという、従来の夫婦とは全く異なった男と女の間接関係を、結婚によって築いていこうというのが、彼の Rhoda への申し出であった。結婚した女性の置かれている立場を “near the animals” (OW, p. 58)と捉えている Rhoda にとって、Everard の提案は魅惑的であった。

しかしこの Everard の求婚を、彼女は “How can I help them so effectually as by living among them, one of them, and showing that my life is anything but weariness and lamentation?” (OW, p.183)と断る。結婚しなければ、女の人生には何の意味も価値もないという社会通念に、強く反対している彼女は、まるで奴隷のような煩わしい結婚などむしろしない方が、一層充実した満足できる人生を送ることが出来るのだということを、身をもって若い女性たちに示している。その自分が彼と結婚するわけにはいかないのである。

ヴィクトリア時代、女性に対しては何よりも ‘womanly’ が要求された。何をするにしても、「婦人にふさわしい」かどうかの問題とされた。その点、看護婦や家庭教師は女性にとって考えられる限りの最もふさわしい職業であった。しかし、求職と求人アンバランスは甚だしく、先に見てきたように、例えば家庭教師の労働環境は劣悪になる一方である。Rhoda が先輩として慕い志を共にする、Miss Barfoot は次のように言う。“A governess, a nurse, may be the most admirable of women. ... But these are only a few out of the vast number of girls who must, if they are not to be despicable persons, somehow find serious work.” (OW, p.135)

Miss Barfoot と Rhoda は、むしろ看護婦や家庭教師といったような女らしい仕事はもう要らないと考える。“An excellent governess, a perfect hospital nurse, do work which is in valuable; but for our cause of emancipation they are no good--nay, they are harmful. ... The old types of womanly perfection are no longer helpful to us.” (OW, p.136) 女の職業＝看護婦や家庭教師という考えは古い。新しい時代にふさわしい、新しい女性のための職業分野の開拓こそが必要なのだという理念に基づき、彼女たちは共同事業者として若い女性の職業訓練教育に情熱を燃やす。

女が職を得て自活することが、どれほどむづかしいことであるか、Rhoda は百も承知である。女は通常、働いて収入を得るという事態を想定して、育てられてはいない。それであるからこそ、さまざまな職業訓練を施す必要がある。“girls are to be brought up to a calling in life, just as men are.” (OW, p.98) ちゃんと職業教育を受けて仕事に就くことが出来れば、女性にとって家事労働の

意味が変わってくるはずだと、Rhoda は Everard に言う。“Home work will be their serious business, instead of a disagreeable drudgery, or a way of getting through the time till marriage offers.” (OW, p.99) 仕事に関して基本的に、女は男と平等に能力があるという Miss Barfoot の持論は、Rhoda の信念でもある。“whatever man could do, woman could do equally well- those tasks only excepted which demand great physical strength.” (OW, p. 54)

結 び

ヴィクトリア朝の最後の10年。時代はまさに大きく変わろうとしている。ある読者が “Curious to state, Mr Gissing’s women are far truer to nature than his men.”²³⁾と評しているように、Gissing の描く女たちは生き生きとして生活感に溢れている。どの女も「新しい明日」に向かって行動しているという印象を、読者に強く与える。

女の自立を目指して職業教育の普及に精魂を傾ける Rhoda と Miss Barfoot のもとには多くの若い娘が、実務に役立つ技術を習得したいと通ってくる。タイプライティングを熱心に習う者、また、将来自分で新聞を発行するために、出版業務に関わる技術を習得しようと勉強している者など、いずれも自立心に溢れた女たちである。結婚はとりあえず彼女たちの眼中にはない。男を当てにしてはいないのだ。

結婚を選択した Monica は、「家庭の天使」になることが出来なかった。彼女の場合は、彼女自身に自分が何をしたいのか、どう行動すればよいのかが分からなかったのであるが、夫が要求する「妻のあるべき姿」に反発し、悩みながらも夫と家庭を拒否し続ける。答えが出ないまま、彼女は衰弱死してしまうのであるが、少しでも自分らしく生きようとし始めた折の死であった。

貧苦の日々の中で一見頼りなさそうだが逞しく生きている Alice も、雑草のようなりアリティをもって読者にその存在を印象づける。ほとんど絶望的と思われるような厳しい経済状況下にあっても、Alice はへこたれない。弱音を吐くことをせず、一時の感情に流されることもなく、その時点で自分に出来る最大の努力をしようとする。決して派手ではなく、取り立てて自己主張もしない。誰からも軽んじられ忘れられているような存在であるが、彼女は、女性のために社会を改革しなければという信念をもって生きている Miss Barfoot や Rhoda とは、まるっきり異質の強さを備えた女であると言える。

次に引用するのは、当時の書評である。“As a novel it is decidedly ‘uncheering’; ... Yet latent in it all is an element of hope, a something that encourages the idea that with time and effort the baffling problem of the odd women may be successfully solved.”²⁴⁾ *The Odd Women* は19世紀末という時代風潮を見事に捉えており、そしてまた、来るべき時代への希望に充ちたものであった。Miss Barfoot が Everard に言った言葉 “Oh, you are still very conventional.” (OW, p.141) は、Gissing が社会に向けて言った言葉でもあるのだ。旧来の因習的な社会とはそろそろ決別すべきだという Gissing の訴えは、Rhoda や Miss Barfoot の言動を通して随所に見られる。結局は破談になったものの、Rhoda と Everard との結婚に関して Gissing が示した “an equal union, in which each would respect the freedom and individuality of the other”²⁵⁾ という考え方も、新しい時代の到来を期待させるのに十分なものであったろう。

注

- 1) Virginia Woolf, “The Novels of George Gissing”, *The Times Literary Supplement*, in *Gissing: The Critical Heritage*, ed. Pierre Coustillas and Colin Partridge (London: Routledge & Kegan Paul, 1972), p.533.
- 2) George Gissing, *The Odd Women* (New York: W. W. Norton & Company, 1971). 同書からの引用は、本

文中にて(Ow)と表記し、引用頁数を併記した。

- 3) Bernard Bergonzi, "8. Late Victorian to Modernist," *The Oxford Illustrated History of English Literature*, ed. Pat Rogers (Oxford: Oxford University Press, 1987), p. 379.
- 4) *Ibid.*, p. 395.
- 5) *Gissing: The Critical Heritage*, p. 218.
- 6) *Ibid.*, p. 219.
- 7) 川本静子、『ガヴァネス (女家庭教師)』中央公論社、1994年、p. 14.
- 8) G. Kiston Clark, *The Making of Victorian England*, p. 5, quoted in Lynne Agress, *The Feminine Irony: Women on Women in Early-Nineteenth-Century English Literature* (Granbury: Associated University Presses, 1978), p. 32.
- 9) L. C. B. シーマン、社本時子・三ツ星堅三訳、『ヴィクトリア時代のロンドン』創元社、1987年、p. 12.
- 10) 同上書、p. 156.
- 11) 同上書、pp. 160-62.
- 12) 古賀秀男、『チャーティスト運動の構造』ミネルヴァ書房、1994年、pp. 36-39.
- 13) Elizabeth C. Gaskell, *Life of Charlotte Brontë* (London: Routledge/Thoemmes Press, 1997), I, pp. 191-92.
- 14) 川本静子、p. 58.
- 15) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, (New York: W. W. Norton, c1971), pp. 75-76.
- 16) 川本静子、pp. 20-28.
- 17) 同上書、pp. 20-28.
- 18) エドワード・クック、中村妙子・友枝久美子訳、『ナイティンゲール「その生涯と思想」Ⅱ』時空出版、1994年、p. 166.
- 19) 同上書、p. 164.
- 20) 同上書、p. 168.
- 21) Charles Dickens, *Oliver Twist*, (London: Dent, 1975), p.177.
- 22) クック、pp. 199-204.
- 23) *Gissing: Critical Heritage*, p.217.
- 24) *Ibid.*, p.218.
- 25) *Ibid.*, p.223.

参考文献

- Altick, Richard D.. *Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern Reader of Victorian Literature*.
New York: Norton, c1973.
- Williams, Merryn. *Women in the English Novel, 1800-1900*. London: Macmillan Press, 1984.